

氏 名	やま もと まさ こ 山 本 雅 子
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 183 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	「時」に関わる文法形式の認知的意味 ——テンス・アスペクトとパースペクティヴ——

論文調査委員	(主 査) 教 授 山 梨 正 明	教 授 大 木 充	助教授 河 崎 靖
--------	----------------------	-----------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、認知言語学のパラダイムに基づく文法論と意味論の観点から、日常言語のテンス・アスペクトのメカニズム（特に、文レベルとテキスト・レベルにおける日本語のテンス・アスペクトの多義性のメカニズム）の解明を試みた実証的研究である。全体は、5章から成る。

第1章では、本研究の分析の基本的な枠組である認知言語学のパラダイムの理論的な位置づけを明らかにし、認知言語学の理論的な枠組に基づいて、従来の言語学の研究において統一的な分析が試みられていなかったテンス・アスペクトにかかわる言語現象に関する形式的な規定がなされる。本章では、特に音韻・形態論的な視点から日本語のテンス・アスペクトにかかわる言語形式をテンス形式を特徴づける形態素（/-ru/, /-ta/）とアスペクト形式を特徴づける形態素（/-ø-/、/-i-/）に区分し、これらの基本的な形態素に基づき、日本語のテンス表現、アスペクト表現及びテンス・アスペクトの複合表現の音韻・形態レベルにおける分布関係の形式的な分析がなされる。さらに、本章では、この分析に基づき、日本語の過去、現在、未来にかかわるテンス形式と事態認知の諸相にかかわるアスペクト形式の多義性、形式と意味のずれ、語用論的な文脈における意味解釈のゆらぎの問題が体系的に考察されている。

第2章では、認知言語学の分析の主要モデルの一つとして注目されるテンス・アスペクト体系の認知モデルに基づいて、グラウンド化の観点から、テンス表現とアスペクト表現の形式と意味の対応関係に関する認知的な記述と説明を試みる。テンス・アスペクト体系の認知モデルは、テンス表現とアスペクト表現の意味機能が、本質的に言語主体が外部事象を主観的に把握していく際のグラウンド化の認知プロセスを反映する点に注目し、テンス・アスペクトにかかわる言語現象の一般的な説明を試みるモデルである。本章では、このモデルを、日本語のテンス形態素の形式と意味の対応関係の記述と説明に適用するために、テンス・アスペクト体系の認知モデルの下位モデルとして、基本認識モデルとタイムライン・モデルが導入される。前者のモデルは、表層の言語レベルにおける時制形式の無標性（すなわち、現在時制のデフォルト的な無標性）と有標性（仮定表現、条件表現等における過去時制の有標性）の対立により、外部事象を現実世界ないしは可能世界における現前の了解可能な事象として認識するか、遠距離の既知現実の世界として認識するかの違いを規定する。このモデルの導入によって、現在と過去の意味機能にかかわる時制形式の表層レベルにおける対立関係が、言語主体の認識領域における近接／遠離の対立関係に基づいて一般的に説明される。また、テンス・アスペクト体系の認知モデルのもう一つの下位モデルであるタイムライン・モデルでは、時間の流れのメタファーとグラウンドの概念が導入される。後者のグラウンドは、外部事象を主体的に把握し意味づけする言語主体の視座を律する場であり、この場は、無標の発話行為においては言語化されない。本章では、この下位モデルにより、過去時制の言語形式と仮定、条件等にかかわるモーダル表現の共起性、現在時制の言語形式とモーダル表現の非共起性等の言語現象が体系的に分析されている。

第3章は、日本語のテンス、アスペクトにかかわる言語表現の形式と意味の対応関係を、認知言語学の言語分析の中核をなす主体化（subjectification）の認知プロセスと＜起点—経路—到達点＞のスキーマのメタファーに基づくタイムモデル

(すなわち、〈始点—経過—終点〉のスキーマのタイムモデル)に基づいて分析し、状態、継続、瞬間等の時間相にかかわる言語現象の体系的な記述と説明を試みている。〈始点—経過—終点〉のスキーマのタイムモデルでは、これまでの認知言語学の研究で明らかにされている空間認知と空間移動を規定する〈起点—経路—到達点〉のスキーマの構造を、時間の推移関係の認知ドメインの構造へのマッピングとして規定する。この規定に従うならば、空間的(ないしは物理的)ドメインにおける起点は時間推移の始点に、空間における移動の経路は時間的な経過に、また空間的(ないしは物理的)ドメインにおける到達点は時間推移の終点に写像される。本章の前半では、この〈始点—経過—終点〉のスキーマのタイムモデルにより、状態、継続、瞬間等の時間相にかかわる言語表現の多義性を体系的に説明している。また、本章の後半では、このタイムモデルに基づく分析を、過去時制、現在時制の形式をとる日本語の主観的な時間表現の事例に適用することにより、プロトタイプとしての過去時制の用法と完了、確認、想起、発見等の拡張的な用法の多義性、さらにプロトタイプとしての現在時制の用法と習慣、予定、確定、未来等の拡張的な用法の多義性を体系的に説明している。

第4章は、前章までの文レベルにおけるテンス・アスペクトの認知言語学の分析を、小説の地の文から構成されるテキストレベルの現在時制と過去時制の交替現象の分析に適用している。これまでの言語学の研究では、文レベルにおける時制現象の研究は、国文法と日本語学の分野を中心に記述レベルの研究が試みられているが、テキスト・レベルにおける時制現象の研究は本格的にはなされていない。日本語の小説等の語りにかかわる地の文では、同じ事態がある場合には現在時制によって(またある場合には同じ事態が過去時制によって)叙述される現象が広範にみられる。本章では、この時制交替の現象を、語り手と語られる事態との関係を規定する視点移動の認知モデルによって分析している。この視点移動の認知モデルの基本的な特徴は、(1)事態認知における前景化/背景化の視点の転換と(2)事態認知の既存性/現存性の視点の転換をモデル化している点にある。本章では、このモデルを、小説のテキスト・レベルに適用し、語りの文から構成されるテキストの現在時制と過去時制の交替関係を、同じ状況に対する上記(1)、(2)の事態解釈の前景化/背景化と既存性/現存性の認知のダイナミックな視点の転換プロセスによって説明している。

第5章では、理論面・実証面からみた認知言語学のテンス・アスペクト研究の意義と展望が論じられている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、新しい言語学のパラダイムとして注目される認知言語学の文法論と意味論の観点から、日常言語のテンス・アスペクト(特に日本語のテンス・アスペクト)の多義性のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。

これまでの言語学の研究では、日本語のテンス・アスペクトにかかわる言語現象の形式と意味の対応関係に関する統一的な規定はなされていない。特に、従来の研究では、テンス・アスペクトにかかわる言語現象の形態レベルと意味レベルの規定に関し、一貫性のある分析基準が提示されていない。本論文の注目すべき点は、日本語のテンス・アスペクトの言語形式を、テンス形式を特徴づける形態素(/-ru/, /-ta/)とアスペクト形式を特徴づける形態素(/-o-/, /-i-/)に区分し、この形態的な区分に基づき、テンス表現、アスペクト表現及びテンス・アスペクトの複合表現の音韻・形態レベルにおける分布関係を統一的に分析している点にある。さらに、本論文では、言語主体の事態認知を反映するテンス・アスペクト体系の認知モデルに基づいて、テンス表現とアスペクト表現の形式と意味の対応関係に関する認知的な記述・説明を試みている。これまでの言語学の分析では、テンス・アスペクトにかかわる現象を、自律的な言語記号の形式と意味の内的な関係として規定し、この種の言語現象の背後に存在する言語主体の事態認知の場(ないしはグラウンド)との関連で規定していく視点(すなわち、言語主体の事態認知にかかわる語用論的なグラウンド化の視点)が欠如している。本研究の独創的な点は、このグラウンド化の視点を反映するテンス・アスペクト体系の認知モデルを構成する二つの下位モデル(基本認識モデルとタイムライン・モデル)に基づいて、テンス・アスペクト現象の形式と意味の対応関係の再規定を試みている点にある。前者のモデルの基本的な特徴は、外部事象を、現実世界ないしは可能世界における現前の了解可能な事象として認識するか、遠距離の既知現実の世界として認識するかの違いを規定する点にある。この基本認識モデルの導入により、現在と過去の意味機能にかかわる時制形式の表層レベルにおける対立を、言語主体の認識領域における近接/遠離の対立関係に基づいて一般的に説明することが可能となる。さらに、このモデルの導入により、表層レベルにおける時制形式の無標性(すなわち、現在時制のデフォルト的な無標性)と有標性(仮定表現、条件表現等における過去時制の有標性)の対立の一般的な予測が可

能となる。また、テンス・アスペクト体系の認知モデルのもう一つの下位モデルであるタイムライン・モデルの導入により、従来のテンス・アスペクトの分析では統一的な説明がなされていなかった過去時制の言語形式と仮定、条件等のモーダル表現の共起性、及び現在時制の言語形式とモーダル表現の非共起性にかかわる言語現象の一般的な説明が可能となる。

これまでの認知言語学の研究では、言語主体の認知能力を特徴づけるイメージスキーマ（＜起点—経路—到達点＞のスキーマ、＜遠・近＞のスキーマ、＜リンク＞のスキーマ、等）の研究が進められているが、この種のスキーマの分析を、日常言語のテンス・アスペクトにかかわる言語現象に適用した研究は存在しない。本研究の注目すべき点は、空間認知と空間移動を規定する＜起点—経路—到達点＞のスキーマの構造を、時間の推移関係の認知ドメインの構造へマッピングするモデルとして、＜始点—経過—終点＞のスキーマのタイムモデルを提案している点にある。本研究は、このタイムモデルを、状態、継続、瞬間等の時間相にかかわる言語表現の多義性と、過去時制（ないしは現在時制）の形式をとる日本語の主観的な時間表現の多義性の分析に適用することにより、プロトタイプとしての過去時制の用法と完了、確認、想起、発見等の拡張的な用法の多義性、さらにプロトタイプとしての現在時制の用法と習慣、予定、確定、未来等の拡張的な用法の多義性を体系的に説明している。

本論文では、さらに認知言語学の枠組みに基づく文レベルの時制現象の分析を、小説の地の文から構成されるテキスト・レベルの現在時制と過去時制の交替現象の分析に適用している。日本語の小説等の語りにかかわる地の文では、同じ事態がある場合には現在時制によって（また、ある場合には同じ事態が過去時制によって）叙述される現象が広範にみられる。本研究の独創的な点は、この時制交替の現象を、語り手と語られる事態との関係を規定する視点移動の認知モデルによって分析している点にある。この視点移動の認知モデルは、基本的に、(i)事態認知における前景化／背景化の視点の転換と(ii)事態認知の既存性／現存性の視点の転換に基づいている。本研究では、このモデルを、小説のテキスト・レベルに適用し、語りの地の文から構成されるテキストの現在時制と過去時制の交替現象を、同じ状況に対する上記(i)、(ii)の事態解釈の前景化／背景化の視点の転換と既存性／現存性の視点の転換プロセスによって説明している。従来の言語学の研究では、文レベルにおける時制現象の研究は、国文法と日本語学の分野を中心に記述レベルの研究が試みられている。しかし、これまでの言語学の研究分野では、文を構成要素とするテキスト・レベルにおける時制現象の研究は本格的にはなされていない。本論文は、言語学の研究を、これまでの文－文法中心の研究から、文脈的な要因をも考慮したテキスト・談話レベルの言語学の研究に拡張していくためのケース・スタディとしても重要な意味をもつ研究と言える。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは、言語、認識、思考、推論等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本論文は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年1月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。